

大雪女
大泉八雲



それは寒い雪の夜だった。
しんしんと降り積もる雪に
閉ざされ、山小屋で寝ていた
男がふと目を覚ますと、そこ
には恐ろしい目をした女が
立っていた。

女は身長五十メートル。長
い黒髪を吹雪になびかせてい
た。

「大雪女だー！」

男は慌てて小屋を飛び出し、
村に向かって逃げようとした。

しかし大雪女は口から冷凍
光線を吐きながら迫ってくる。

「がおー！」



そのときだ、雪山の尾根に一台の戦車が現れた。地球防衛隊だ！

戦車の砲塔が回転し、砲身が大雪女にまっすぐ向いた。

バーン！

大砲が放たれた。

弾は大雪女の胸に当たり炸裂した。

白い着物に赤い炎が立ち上る。

大雪女はギャツと悲鳴をあげたが、すぐに大きな手で雪をすくいあげると、燃え上がった部分にこすりつけた。



すると不思議なことに、炎
が消えて着物はもとのままの
純白に戻った。

「撃て！」

隊長が命じると、次の弾
が放たれた。

これも見事命中するが、被
弾箇所には大雪女は雪をこすり
つけると、跡形もなくきれい
になってしまう。



「隊長！ これではきりがありません」

隊員の一人が隊長に言った。

「雪の中で大雪女を相手にするのは難しい……」

隊長は考えた。そして、意を決したように、拡声器を手に取ると、ハッチを開けて降りしきる雪の中に半身をさらした。

隊長は拡声器のスイッチを入れ、大雪女に向かって言った。

「今晚は、雪でスノー」

隊長の声が山々にこだまし、雪の中に消えていった。

静寂が流れる。



大雪女の目がつり上がった。彼女は戦車に向かって冷凍光線を吐き付けた。

隊長は慌ててハッチを閉じて戦車の中に戻る。

「ダメだったか。私のユーモアで大雪女の凍った心を溶かそうと思ったのだが……」

「隊長！ 今の冷凍光線で大砲をやられました。もう打つ手がありません！」

「なに！」

隊長は頭を抱えた。もはやこれまでか。誇りある地球防衛隊が大雪女に敗北してしまうのか。

戦車内部図



だがそのとき、隊長はあるこ
とを思い出した。

隊長の目が光る。

「そうだ、どうして思いつかな
かったのだろう。その手があつ
たじゃないか！ 栄光の地球
防衛隊は負けはしないぞ！」

隊長は戦車の戸棚から、な
ぜか偶然準備していたプラス
ティックの飼育セットからカエ
ルを取り出した。



「頼んだぞー！」
隊長はそうカエルに言うのと、
ハッチを開けて再び外に身を乗
り出した。

「大雪女よ！ ほらー！」
そう言って大雪女に向け
てカエルを差し出す。
それを見た大雪女
はギャーッと悲鳴を
あげてその場に
しゃがみこんだ。
そして、両手で頭
を抱えたかと思うと、
体全体が粉雪となっ
て舞い散った。



大雪女は消えた。

隊長は、ゆっくりと戦車内部に戻ると、カエルをやさしく水槽に戻し、制服で濡れた手をぬぐった。

「隊長、やりましたね！」

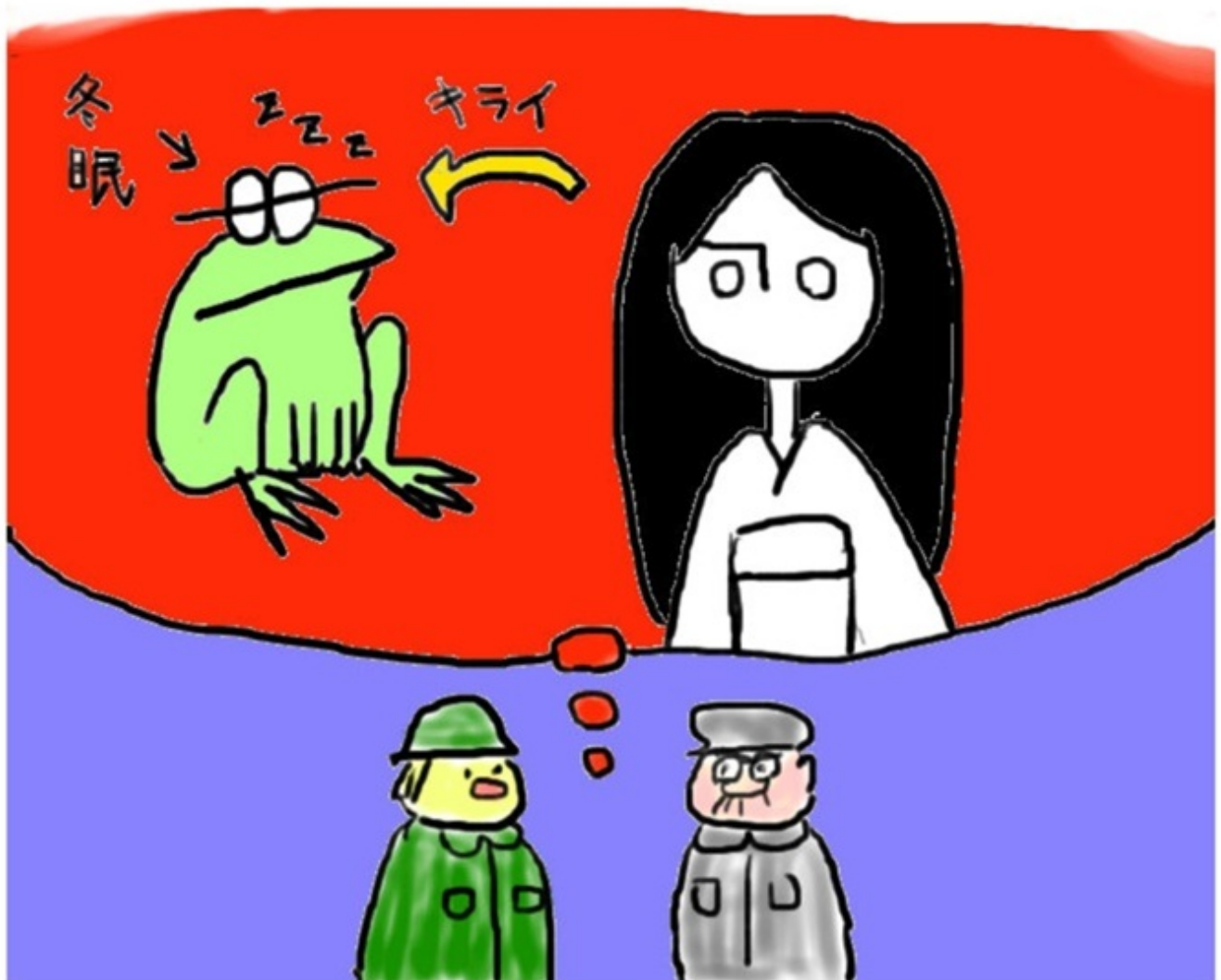
隊員たちが隊長を囲む。

「ああ、我々は勝利した」

「しかし隊長、大雪女がカエルを嫌いだったとは、よくわかりましたね」

「ふん」と隊長は満足げに笑った。

「よく言うじゃないか。ユキはよいよいカエルはコワイとな」

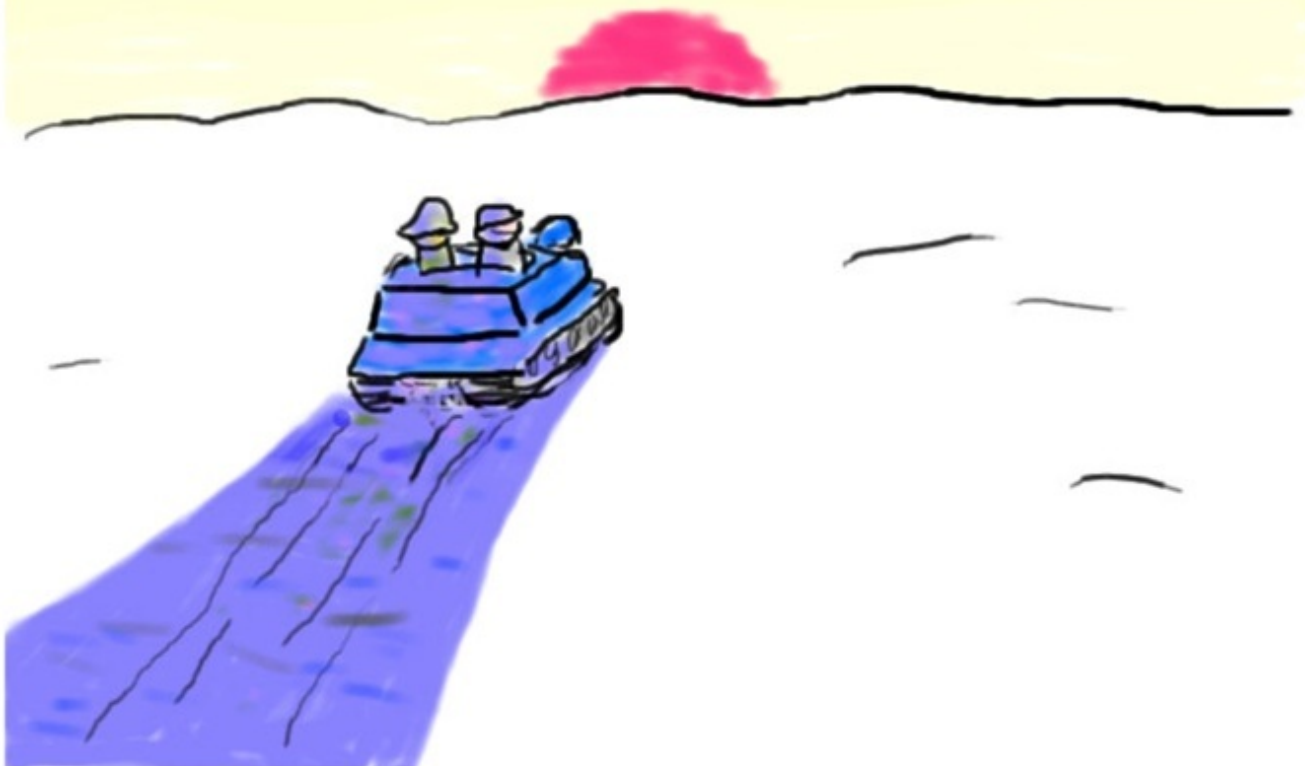


隊長はそう言うと、戦車のハッチを開いた。夜明けの太陽が戦車内に差し込む。

明け方まで降り積もっていた粉雪が舞い、朝日にきらきらと輝く。

目映い光に照らされた隊長の誇らしげな顔を見た隊員の中には、「カエルはコワイ」ではなく「帰りはコワイ」だと、おそろく子供のころからずっと勘違いしているのである。隊長の間違いを正そうとする者はいなかった。

おわり



大雪女

<http://p.booklog.jp/book/72819>

著者：大泉八雲

絵：中川善史

発行：文豪堂書店

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72819>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72819>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ